学生・教員が共に成長する場を求めて
～「学校ボランティア」の展開に関する報告～

本間　利夫

はじめに

本稿は神大教職課程の「学校ボランティア」活動をより発展させた取組の報告である。筆者がボランティア先の学校へ出向き，学生と現職教員をつなぎ共に成長を図ることを試みたものである。これは，筆者が後述する福井大学教職大学院のプロジェクト「グローバル社会に必要な教師教育の革新をスピーディに実現する連携事業の推進」における同大非常勤講師という立場で関わったものである。

2013年度2014年度については「神奈川大学心理・教育研究論集」第38号に同タイトルで中間報告した。今回2015年度2016年度を加え４年間の報告をする。ただし，前半の２年間については「心理・教育研究論集」第38号を再掲する（一部修正　以下中間報告と記す）。

Ⅰ　2013～2014年度活動報告（中間報告から）

本学の教職課程における「学校ボランティア」の取組は，年々多岐にわたり多くの活動成果を上げている[1]。

その中心的な推進者である入江直子教授から，2013年度の始めに後述する福井大学教職大学院の取組を模した活動を神奈川大学でも出来ないだろうかと相談を受け，教職課程の非常勤講師であり，中学校勤務の経験もある私にその任に当たるよう依頼された。

ここでは，以後２年余の手探りで実践してきたことを中間報告の形でまとめてみた。

１．福井大学教職大学院の特色

福井大学教職大学院の特色は，図１で見るように学校拠点協働実践研究プロジェクトにある。拠点校や連携校が抱える課題について大学と学校が協働して取り組むことを教育課程の中心に置いている。

スクールリーダー養成コースの院生（現職教員）は，自分の学校で学校の課題を追究し，そこに教職専門性開発コースの院生（学部進学者）が長期インターシップとして入る。加えて大学教員もティームで学校に入り協働していく。この様な学校現場における実習が単位になる。大学では学校行事等に配慮した時期に集中講座や合同カンファレンス，ラウンドテーブルを行う。

この形式は，今日的課題について学校の生きた教育活動を通して実践的に研究を進められること，現職教員が研究のために学校を離れにくい現実が解消されること等の利点がある。福井大教職大学院はこのやりかたで多くの成果を上げており，文科省も高く評価している。

この「学校拠点の教師教育」の全国的な展開をめざして，福井大学は，全国の12国立・私立大学との連携によるプロジェクト（GP）「グローバル社会に必要な教師教育の革新をスピーディに実現する連携事業の推進」（平成25年度

～平成28年度）に取り組んでいる。本学は，単に教職課程をもつ私立大学であるが，このプロジェクトにおける連携機関として，実務家教員（非常勤）の人件費が配分されることとなり，前述のように，私がその任に当たることになったのである。

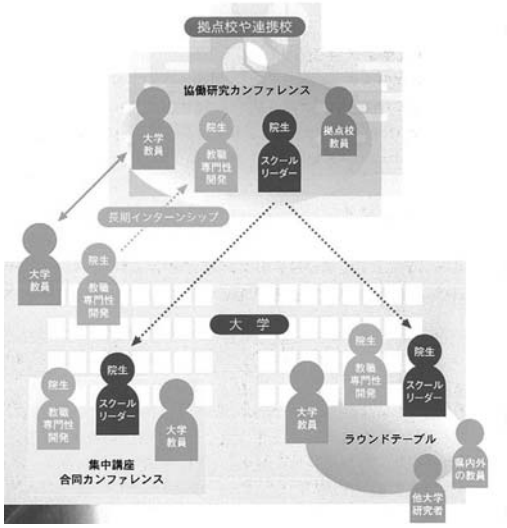

図１（福井大学教職大学院紹介パンフレットより）

２．神奈川大学における取組の模索

教職大学院はもとより教員養成の学部もない本学で，福井大から学び何ができるか考えた時，入江教授が，既に地域の学校とのつながりの中で成果を上げている「学校ボランティアにおける学びの展開」を考えられたのは当然であったといえる。

それを受け，私は福井大の取組から「学校ボランティア」の活動に取り入れられそうなことを次のように整理し活動目標としてみた。

目標①　大学教員が学校現場で学校ボランティア学生を指導支援する。

これまで学生の学校での指導は基本的にボランティア受け入れ校にお任せであったが，大学の教員である私が学校に出向きその場で指導に加わる。また，時間があれば管理職や担当者を交えた研究協議を行う。

目標②　①に関連し，両者の間に大学教員が立ち，より教育効果を上げる為の仲立ちをする。

学生と受け入れ校や教員の思いや願いを双方から聴き取り協議し，活動をより良い方向に導く。

目標③　学生と受け入れ校の現職教員が共に資質能力を高める機会を図る。

学生と教員双方が共に成長する場を設定し，大学も専門性を生かして協働する。福井大から学ぶこの取組の最大且つ最終的な目標とする。

目標④　大学内で実施されている，授業「学校ボランティア演習」，ボランティア先の学校との情報交流会，教職課程が開催する関係者との教育研究交流会等を有効活用する。

上記①～③の目標を達成する為に，これらの場を活用し情報発信や情報交換を行う。

３．2013～2014年度活動報告

(1) 2013年度

活動の開始は，福井大学教職大学院との事務上の手続きもあり実質的に10月に入ってからになった[(2)]。ボランティア受け入れ校を週１回のペースで訪問することから始めた。２月末までで14校延べ31名の学生と接することが出来た。

１年目の活動の中心は，受け入れ校への挨拶及びこの活動の説明と，目標①の学校現場での学生の指導支援に置いた。

挨拶の中で，多くの学校でボランティア学生の評価が概ね高く大変助かっているとの言葉をいただき，「学校ボランティア」が根付いてきていることが分かった。ただ目標③については今一つイメージがつかめないようで，早期の具体化の必要を感じた。何よりの収穫は，大学の教員が受け入れ校に足を運ぶことで両者の信頼

関係や連携の強化に役立つ思いを強くしたことであり，事実，以後回を重ねる毎に現実のものとなっていった。

目標①についての取組

現場での学生指導は，活動状況を目の当たりにし，新たな気づきがあった。以下幾つか列挙してみる。

・現場での直接指導で学生の学びが効果的に深まり，その場での課題解決に結びつきやすかった。
・学生が大学では経験できない学びを得ていることを改めて実感でき，「学校ボランティア」の有効性を確認できた。
・大学の教員が入ることで，学生に良い意味での緊張感と向上心が生まれるのを感じた。
・経験の長短にもよるが，「お客さん」的な学生もいて，指示待ちせず，もっと自分から子どもや担当教員の中へ入ることを指導する場面が多くあった。
・学生の課題が，学習指導より子どもとの関係づくりや声かけ，児童・生徒理解の難しさにあることがわかった。
・管理職や担当者との研究協議は時間的に取りにくい場合が多かった。それでも，授業後の僅かな時間に行う協議は，担当教員や学生の思いの交換ができ有効であった。
・現場での直接指導の延長として，白幡小での全国公開研究発表会，荏田南中での社会科教育研究大会に参加する学生が出てきたことは嬉しい成果であった。

目標④についての取組

これらの目標①に関して感じたことを学校ボランティア演習及び学校ボランティア情報交流会の場で発信する機会を持った。

(2) 2014年度

目標①についての取組

受け入れ校14校で学生延べ47名を指導支援できた。２年目にあたり学生が私に自らアドバイスを求める姿勢も見られるようになり，研究協議の時間を設定していただける学校も増加した。

この状況を踏まえ，年度の重点を目標②と③の実現に置くこととした。手立てとして，連携の歴史が古く多数の学生を受け入れていただいている白幡小，栗田谷中，松本中を拠点校と定めた。そこでの成果を全体に広げていく手法を取った。

目標②についての取組

学生からの聴き取りは，実習中と大学での学校ボランティア演習後の時間に行った。

・学校作成の振り返りカードが学校全体のものとなっていなくて教員によって扱いが違い戸惑う。
・控室や個別指導室の冷暖房が不完全で学習環境が悪い。
・個別指導の教材の準備が不十分である。
・自分の教科だけでなく，同じクラスの他の教科を見たり，また，個別支援学級を見たりすることはできないか。
・子ども理解のための情報をもう少し提供してもらえないか　等

いずれの課題も私が学校側に伝え，解決ができた。しかし本来は個別に学生が学校と話し合って解決を図ることであり，学生のそういった力の不足を感じた。

学校側の聴き取りは拠点校に限らず学校訪問時に行った。

・学生からの欠席や遅刻の連絡が遅れたり無いことが予定をたてるのに一番困る。
・もっと遠慮しないで質問して欲しい。忙しく答える余裕のない時はその旨伝えから。
・指示を待たなくても，この場面では何をすべきか，誰に寄り添うべきか判断して欲しい。
・私たちと一緒に子どもの成長を喜び合う姿勢に期待する。等

これらについては当該学生に個別に指導したり，学校ボランティア演習の場で発信した。熱心に指導していただいている学校，担当者ほど要求も高かった。

目標③についての取組

学生に関わることを通して，現職教員が意識の有無に係らず，教員としての資質能力の向上につながる機会になっていることはどの管理職も認めるところである。

一歩進んで，意図的にねらいを持って，学生と現職教員双方が資質能力を高め合い，共に成長できる場を設定する。その第一弾として栗田谷中の協力で「若手現職教員と何でも語ろう会」を実施することができた。これについてはこの報告のメーンなので別項を起こして詳述する。

受け入れ校の訪問が回を重ねると，管理職からその学校に勤務する本学の卒業生教員を紹介され指導を依頼されることがあった。４校４名に対し指導支援する機会を得た。これも目標③に繋がると捉えている。

目標④についての取組

学校ボランティア演習に５回参加し学校現場での指導経験をもとに助言を行った。また，学校ボランティア情報交流会，教育研究交流会に参加して関係者と交流し活動の深まりを図った。

４.「若手現職教員と何でも語ろう会」

学校ボランティア拠点校に通う学生に企画の趣旨を話し，どんな内容がよいか考えさせてみた。その中で現職の教員と気楽にじっくり話す機会が欲しいとの意見が多かった。そのことを拠点校である栗田谷中の千田校長に相談したところ，今，学校現場では若手教員が増加しており，その育成が大きな課題となっているということであった。学生の要求を満しながら，同時に若手教員の資質能力の向上を図る機会を企画，実施してみることで一致した。その趣旨で企画，実施したのがこの会である。

日時　2014年11月17日（月）
　　18時20分～20時
場所　横浜市立栗田谷中学校
　　会議室　保健相談室
参加者　栗田谷中若手教員４名(経験３年以内)
　　校長　教務主任（学生窓口担当）
　　大学教員１名（本間）
　　学生20名(栗田谷中に通う学生がボランティア学生全体に呼びかけた)

(1) 当日の運営

全体会　①挨拶と会の趣旨説明　本間
　　②学生に期待すること　教務主任
　　③４人の若手教員の自己紹介
　　④進め方の説明とグループ分け
分科会　司会は２グループとも学生
　　①学生自己紹介
　　②教職の現状と思い　若手教員
　　③質疑・応答　歓談
　　④感想　お礼
全体会　①振り返り用紙の記入
　　②今日のまとめ　校長

(2) 会の様子と成果

なるべく気軽に本音で話せるように私と校長は分科会には時々顔を出す程度にした。二つの会場からは大きな笑い声も聞こえ楽しそうで良い雰囲気が伝わってきた。全体会では教務主任から「教員と共に子どもの成長を喜び合いましょう」「君たちと立場を同じくして働ける日を待っています」など熱いメッセージを送られ学生が感激していた。会の雰囲気がよかったのか，終了後何人かの学生と教員が居酒屋で続きを行ったことを後から知ることになった。

私なりに成果をまとめてみる。

＜学生にとって＞

少し上の先輩と気楽に話せたことにより，学校ボランティアや教職について考えていた疑問や課題解決の場となり，教職に向けての意欲を高める機会となった。

＜若手現職教員にとって＞

学生に自分の思いや経験を語ることにより，教員としての自覚が高まり自信を持つことができたようである。改めて教職に就いてからの自

分を振りかえる機会ともなり，今後の取組に繋がる効果もあった。日頃職場では先輩職員に何かと指導される立場から，少し先輩面をして振る舞う中での効果であろう。予想以上の成果として，後日，千田校長から参加した教員の一人が自分の持つ課題を改善しようとする態度が出てきて嬉しく思っているとの報告を受けた。

全体として，両者の学び合いを通して共に成長していこうとする姿勢が感じられた。初めての試みとしては考えていた以上の成果が上がったと評価したい。

(3) 校長からの評価

千田校長から成果と課題について以下の文章が寄せられた。

＜学生にとって＞

学生たちは近い将来自分たちも経験するかもしれない出来事を聴くことができる機会であり，真剣に教員の話に聴き入っていた。年齢の近い人たちの生の声はストレートに学生に響くようである。ぎこちないながらも一生懸命にがんばる少し先輩の話は，現実的で理解しやすいようである。学生は遠慮なく疑問点を若手教員にぶつけていた。ベテラン教員相手だとこうはいかないであろう。

＜若手教員にとって＞

若手教員は自分たちの思いや経験が学生たちに通じると，教員としての自覚が強化され，自信を持つことが出来るようになる。人は語るうちに，気になっていたことや課題が整理され，今後の取組の糸口が見えてくるようであった。学生たちから少し上の話しやすい先輩として見てもらえるだけでも自信になったようである。若者だけの話しやすい雰囲気の中で自己を解放することにより，日頃考えることも出来なかったことも冷静に考える機会にもなったと思う。

課題としては，学校は子どもがいる時間は空き時間がまったくないのが現状である。学生も授業のことを考えると今回のように遅い時間の開始の方がよいのか。双方の参加体制との関係で考えていかねばならぬ課題である。

(4) 振り返り用紙から（抜粋）

＜若手教員＞

・自分のこれまでの経験や思いをありのままに話しましたので，少しでも共感できる部分や参考になることがあれば幸いです。学生のみなさんの熱い思いを聞いてこちらも初心を思い出して頑張ろうと思いました。お互いその熱い思いを忘れないようにしましょう。

・学生さんに質問され，久々に面接を受けているようで新鮮で楽しい時間でした。有意義な会を催していただき感謝しています。

・ＡＴとして教員としてどうあるべきかの根本的な質問を受け，私も初心に帰ることができました。

・学生と話をする中で，自分の教育活動を振り返ることが出来ました。また，同僚の先生による学生へのアドバイスは私へのメッセージでもあると受け取りました。

＜学生＞

・「子どもと共に成長できる」という言葉を聞いて教員になる意欲が強くなりました。継続して見ていくことで子どもの成長に気づき喜びになることも分かりました

・先生方がどんな思いで生徒たちを教えているかよくわかりました。難しいことを考えているよりも生徒にありのままでぶつかることが何よりも大切だと痛感しました。

・普段の活動ではゆっくり聞く機会がないのでためになりました。分からないことをもっと担当の先生に聞かなければと考えました。

・自分がどうしても聞きたかったことが聞けて良かったです。今回の話を踏まえて，生徒や先生方とよりよい関係がつくれるようコミュニケーションをとっていきます。

・先生方の教育観，現在の教育の実態,やりがいなどを聞く機会となりました。生徒に対する一生懸命な姿や自ら学ぼうとする姿勢が求められていることに気づけました。

・自分の悩みを若い先生方と共有することが出来ました。他の学生の思いや考えを聞けたのも収穫でした。
・採用されるまでの道のりが多様であった先生方の話を聞いて励みになりました。このような場があると教職に対する気持ちが少し楽になった気がします。
・先生も一人の人間であるということが分かり人間としての自分のポリシーをもつことが大切だと思いました。
・気になる生徒への対応の話は参考になりました。
・採用試験に失敗し不安に感じていた中で改めて教員になりたいと思え，モチベーションにつなげることが出来ました。
・今度はベテランの先生とお話しして経験談を聞いてみたいとも思いました。
・まずは名前を覚えること，覚えてもらうことが大事であり実践していこうと思います。
・教員になりたい思いを再認識することが出来ました。来年は教員になり自分が学生に伝えられるよう努力していきます。

５．今後に向けて～課題を踏まえて～

栗田谷中での実践を踏まえて，課題も含めて今後を展望してみたい。

(1) 実現出来そうなこと

学校現場での若い教師の増加にともなう資質能力の育成はどの学校でも重要な課題である。同時に教育の場に立ったなら即戦力と期待されるであろう学生にとっても自分の問題である。「何でも語ろう会」は他校でも広げていきたい。若い教員に対し各学校でメンターティームが設けられ研修が行われている。その場に学生や私も参加させてもらうのも良いかもしれない。刺激し合う場となろう。

各学校の課題に即したテーマでの研修に大学教員が専門性をいかして協働することができないかと考える。例えば，発達障害の子どもたちの接し方について悩んでいる教員と支援に入っている学生，それを専門にしている大学教員が共に学び合う場を設定する。同様に，教科指導課題対応に教科教育法研究，運動部の指導課題対応にスポーツの科学的指導法研究，リーダー育成対応に教員免許状更新講習ミニ版による研究なども実現は不可能でないと考える。関係者の協力，連携を得られるかが課題となるが。

(2)「学校ボランティア」を通して学校が変る

各学校が，「学校ボランティア」に来ている学生の学びをより良いものにしようと試みる中で，学校自体の変化も生まれる。「何でも語ろう会」の実践がそれであり，次に紹介するのも一つの例である。

拠点校の一つである白幡小では土曜塾を開催しており本学の学生も支援に入っている。今年度から，学生が支援の中で気づいたこと分からないことを用紙に記して提出。その用紙が必ず担任に回りコメントを書いて返されるシステムが確立された。担任は用紙により子どもの状況を知ると同時に，コメントを書くことにより自分自身のスキルアップを図ることになる。ちなみにこのシステムの提案者は本学の卒業生教員である。

このような小さな実践でも共有していけば，各学校に合わせたものが創造できないかと期待する。

もう少し広げて展望すれば，学校は，昨今「特色ある学校づくり」「開かれた学校づくり」が求められている。その場合，少なくとも神奈川区内の学校は，本学を地域にある教育材と捉えた時，様々な連携が生まれると考える[(3)]。

学校側からの大学への積極的な相談や提案を望みたい。

(3)「学校ボランティア」から大学が得るものと役割

大学が，「学校ボランティア」を発展，深化

させようとする取組は，今回の例を挙げるまでもなく，第一に学生の学びをより良いものにし学生の成長をもたらす。

同時に，今回の実践を通して，「学校ボランティア」活動は，大学が地域に貢献することにつながると実感した。大学の努力が，地域の学校や教員に，そして子どもたちに何らかの光をあてることになるかもしれない。その意味で，神大の教職課程が「学校ボランティア」を進めてきた中で展開している「神大ユースサポートプロジェクト」[(1)]は高く評価されよう。

そして，大学の教員も，地域の学校と学生をつなぎ協働することで多くの学びを得るであろうことを，私自身，今回の取組で確信できた。

この活動は始まったばかりで実績もまだ不十分で課題も多い。それでも徐々にではあるが学校関係者の理解・協力は進んで成果も上がってきている。大学と学校が「学校ボランティア」をより実り多いものにしようとする努力が，双方にとってプラスをもたらす。福井大方式はそのヒントの一つであると考えている。

＜「若手現職教員と何でも語ろう会」分科会風景写真　省略　中間報告参照のこと＞

II　2015～2016年度の活動報告

以上の前半２年間の報告を受けて，その後の活動報告を以下に述べる。

１．2015年度

2014年度までの活動を基に，より発展的な取組みを模索した年度であった。

目標①②についての取組

受け入れ校13校で学生延べ38名を指導支援できた。特に前年度拠点校と定めた白幡小，栗田谷中，松本中では訪問回数を多くしたこともあり，指導支援や協議を学生も教員も日常的に受け止めてくれるようになり取組の定着が感じられた。

目標③についての取組

(1)「現職教員と何でも語ろう会イン松本中」

前述したように2014年度栗田谷中で行ったこの取組が予想以上の成果を上げたので他校にも広めたものである。拠点校である松本中開催を計画し，校長と趣旨の共有を図った。その上で教員の資質能力を高める視点から参加教員の人選を依頼した。

日　時　2016年２月１日(月) 18時～20時
場　所　横浜市立松本中学校　図書室
参加者　松本中若手教員９名 校長 教務主任
　　大学教員２名
　　学生19名（松本中に通う学生がボランティア全体によびかけた）

当日は全体会と３分科会を行い学生が司会等役割分担し運営した。私は別用で参加出来なかったが，全体として和やかな雰囲気の中で学びの多い会となり，「時間がもっと欲しかった」という感想が多かったと報告を受けた。話し合いの内容は①学校ボランティア活動について②教職の現状とやりがい③教員採用試験に向けて等であった。最後に振り返りを教員，学生に記述させた。そこから読み取れる学びは多いが，前年度の栗田谷中開催のそれと重なるものも多いので，一部の抜粋に留める。

＜学生＞

・話の中で出てきた「99回裏切られても100回目に期待しよう」という言葉が印象に残った。
・次回の活動から実践しようと思ったことは，生徒よりも先に挨拶をすることと「ありがとう」と言える機会を作っていくこと。
・自分の思っていた疑問や聞きたかったことが時間をかけ深いところまで聞けて教職の魅力に改めて気づかされた。
・忙しい現状があるのに教職は嫌だという先生はいらっしゃらずキラキラされているのをみて少し安心したと同時に教職志望が強まった。

＜教員＞

・質問や悩みに答えながら自分を客観的に見たり振り返ることができた。やりがいやポリシーなど普段無意識なことを言葉に出してみると自分の考えもまとまり，より強い確信に変わっていくなと感じた。
・自分自身の振り返りと「なぜ教員になろうとしたのか」という初心を思い出すことができた。自分が大学生の頃にもこの様な機会があればよかったのにと感じた。

また，会のねらいや双方の学びを矢田校長から寄せていただいたので紹介する。

＜校長の評価＞

横浜市では今，教職経験10年までの教員が全体の６割近くを占めており，少しでも早い段階でプロとしての実践的指導力を身に付けるなどの人材育成が大きな課題となっている。

経験の浅い教員の資質能力を少しでも早く高めるための方策の一つとして，教員の養成段階での現場体験が有効であると言われている。

教員を目指す学生にとって大学の講義で学ぶだけでなく，生徒とコミュニケーションを図りながら，教員の仕事を体感できるＡＴとしての機会は，自分の将来の姿をイメージすることができる貴重な機会だと思っている。また，「事件は現場で起きている」というように，日々様々な問題が発生する学校現場を目の当たりにし，教員がそれぞれの課題にどのように対応するのかを垣間見ることができる絶好の機会となっている。

今回の取組では，日頃からＡＴとして学校現場を体験していても，日々多忙な教員になかなか質問ができない学生にとって，とても有意義な取組になったと思う。

また，本校の経験の浅い教員にとって，自分の経験を学生に話すことにより客観的に自分を振り返るきっかけになったのだろうと考えている。今回，特に印象深かったのは，本校の初任者がとても嬉しそうに楽しそうに，そして誇らしげに学生に語っている姿であった。日頃から教えてもらうことが多かった初心者にとって学生に話をすることができる活躍の場となったようだ。「育てることで育つ」という言葉があるように自分の現在の姿や課題，そしてこの先の見通しを持つことができた機会となった。

(2)「部活動顧問について何でも語ろう会 イン六角橋中学校」

横浜市立六角橋中学校は市内でも有数な部活動が盛んな学校である。教員も部活顧問として熱心な指導者が多い。顧問としての喜びだけでなく，それだけにまた悩みも多いことを予想した。一方教員を目指す学生の多くは，将来部活顧問になりたいと思っているし，望まなくても部活顧問を引き受けなければならぬことを自覚している。加えて，中間報告で述べた各学校の課題に大学教員がその専門性をいかして協働していく視点から，本学の健康科学スポーツセンターの協力を得てみよう。そのようなねらいを校長と共有し企画実施したのがこの会である。

日　時　2016年２月９日(火) 18時～ 20時
場　所　六角橋中 視聴覚室
参加者　六角橋中若手部活動顧問６名
　　校長　副校長　教務主任
　　大学教員４名（内１名は健康科学スポーツセンター課長）

全体会では健康科学スポーツセンター課長から「部活動指導についての問題提起」をしてもらった。大学運動部の運営，部活はあくまでも教育の一環，科学的指導の大切さ，一人ひとりの成長の違いを捉えること，長いスパンで考え次へバトンタッチしていくこと，リスクマネージメント等が語られた。

それを受け分科会では部活顧問と学生が２グループに分かれ話し合った。

振り返り用紙から，学生たちは自分の中学高校時代の生徒としての経験でしか部活動を捉られていなかったのが，教員として顧問としての視点から考える機会となったこと。教員は自分

の指導の実態を振り返り，これからの部活運営を考える機会になったことが読み取れた。

その一部を紹介する。

＜学生＞

・顧問をすることは自分の時間が少なくなるがそれ以上にやりがいもあることが分かった。
・ルール作りや，コンセプトを部員だけでなく保護者とも共有することが大切と学んだ。
・部活動は技術の向上だけでなく人間力の育成という面で大きな役割を持っていると感じた。
・自分の専門外の顧問を担当した時は「出来ないからやらない」ではなく「出来ないけれど頑張っている」姿勢を見せることで信頼を得ることが大切と知った。
・「生徒に負担を掛けすぎると成長を妨げ次の指導者へリレーすることが出来ない」の言葉は指針にしたいと思う。

＜教員＞

・大学の部活運営が勉強になった。
・大学生からの質問で自分自身の考えが整理された。新たな発見もあった。
・話をする中で自分に足りないと感じたことは部活動の目的意識。子どもたちにどのような経験をして欲しいのか，その先のライフステージにどのようにつなげていくのか，次に待っているコーチにどう引き継ぐのか，その姿を意識する必要性を感じた。
・学生の話を聞き「部活動の在り方」について自分の考えを見直す機会となった。
・講演を聞き，子どもたちとの接し方，リスクマネージメントについて考える機会となった。
・新しく教員になる後輩に向け，良いアドバイスができるよう努力していきたい。

企画した者としての反省は，講演と次の学生と教員の懇談内容とが時間の制限もあり十分に関連づけられなかったことである。

(3)「丸ごと教職体験」

拠点校の一つである，横浜市立白幡小で９月から行った実践である。同校にボランティアで入っている４年生で教採試験に合格した学生１名を対象とした。この学生は４月から教職に就くにしては，今一つ教職に対する自覚や自信が必要な学生であった。校長と相談しこの学生の資質能力を高めると同時に校内で指導的立場にある現職教員（いわゆるスクールリーダー）のさらなる資質向上をねらいとし，「丸ごと教職体験」を計画した。具体的には，学生は活動日に１日中そのリーダー教員とともに行動し指導を受ける。また，学校全体として学生を出来る限り一人の教員として受け入れることで合意した。そのねらいがかなり達成できたことが次の振り返りから読み取れる。

＜学生＞

・「ボランティア」から「先生」への意識や行動が変わっていく自分を感じた。
・教員のすべての仕事を知ることができ，やりがいと同時に忙しさの中での効率性も求められることを感じた。
・保護者，地域と関わる機会もあり連携の大切さを知ることができた。
・先生たちと話す機会が増加し，教員間の協力態勢の大切さを学んだ。
・先生側の意識も変わるように感じた（日毎にアドバイスが細かく真剣になった）。

＜リーダー教員＞

・子どもたちや教職員の姿をより深く知ることができ教育に関わる喜びを味わえたと思う。
・教壇に立つことを前提に，指示や発問，その他すべての業務について具体的にアドバイスしたつもりである。
・学生指導を通して，自分自身が若い教員を育成する喜びと難しさを常に考える時間になった。学生からの学びもあり，学校全体を考える立場に在る者として有意義な経験となった。

嬉しいことに，この学生から現在大変楽しく充実した教員生活を送っているとの報告を受けている。また，このスクールリーダーは４月から副校長に昇任し活躍をしている。

目標④についての取組

7月に大学で開催された学校ボランティア情報交流会で，栗田谷中や白幡小の取組を各学校に紹介した。学生と教員が共に成長する場を各学校でも考えて欲しいとの思いから発信した。

２．2016年度

目標①②についての取組

６月より８校を週１回ペースで訪問し延べ37名指導支援した（12月現在）。訪問学校が少なくなったのは諸般の理由で小学校が対象外（白幡小土曜塾，小学校英語活動は対象）になったからである。その分，学生一人当たりの指導支援回数は増加し継続して見取ることができた。また，今年度から学校別のカンファレンスが月１回割合でもたれるようになった。そのため，特に私の担当である栗田谷中についてはより具体的な指導支援が可能になった。

目標③についての取組

(1)　第二回「若手現職教員と何でも語る会イン栗田谷中」

栗田谷中では2014年度にすでにこの会を開催し，学生と教員双方の資質能力を高める効果を実感していたので第二回もスムーズに企画実施できた。

日　時　2016年11月7日　18時～20時
場　所　栗田谷中地域交流室
参加者　栗田谷中若手教員３名（経験３年以内この人選は学生の要望を校長に考慮してもらった）
校長　副校長
大学教員2名
学生10名（栗中ＡＴ７　他校ＡＴ３）

今回の学生側の最大の成果は栗田谷中に特化した話し合いだったので，日頃の栗中での活動や，接している教員の思いがより具体的で内容の濃いものになったことである。後日のカンファレンスでは，この会以後教員と気楽に話せるようになり活動の質の向上を語る学生が多かった。課題は参加した他校ボランティア学生の満足度の検証である。

ここでは学生，教員の振り返りは省略し教員のその後の変化のみ記述する。

＜校長から寄せられた参加教員の具体的変化＞

・３年目Ａ教諭は日頃から生徒指導に自信がなく，生徒から悪く思われているとの思いに囚われていた。学生からＡ教諭を頼りにしている生徒が結構多いという話を聞き自分自身に自信が出てきたようだ。
・２年目のＢ教諭は学生と意見交換をする中で，学年内での自分の立ち位置が分かってきたようである。会以降学年内で積極的に生徒指導に関わり，リーダーシップを発揮するようになった。授業にも自信を持ち工夫がみられるようになった。
・初任のＣ教諭は「元気の良い子が怖い」と言っていたが，意見交換の中で「一人で悩まない」ことの大切さを学生と共有することができた。ティームで対応することの大切さを理解できたようで，この日から授業も学級経営も積極的になり，学年内で何でも先輩教員に相談している姿を見るようになった。

目標④の取組について

今年度からボランティア先ごとのカンファレンスになったのでそこでの発信が主なものである。

６月の福井大学に於けるラウンドテーブルで，初めて2013年以来のこの取組をまとめて発表した。全国から参加した方々から貴重な意見をいただくことができた。

３．成果と課題

2015年度以降の取組の成果と課題を整理してみる。

（1）　成果

①　中間報告で今後実現出来そうなこととして例示した幾つかの取組が実現したこと。

・栗田谷中で行った「何でも語ろう会」の他校への広がり（松本中，六角橋中）。

・大学教職員が専門性を生かして地域にある学校と協働すること（「部活動顧問について何でも語ろう会」での健康科学スポーツセンター課長の講演）

②　取組の定着と新しい取組スタイルの開発

・４年目を迎え，各学校特に拠点校では，例えば私の訪問時，学生，教員，児童生徒が自然体でかつ暖かく受け入れてくれるようになった中に取組の定着を感じている。

・その信頼関係の上に立ち白幡小での「丸ごと教職体験」のような新しい取組も生まれた。今後も様々な取組が開発できる展望が開けた。

③　大学教職員の理解，協力の広がり

・「何でも語ろう会」について，2014年度までは大学教職員の参加は私一人であったが，この２年は私以外の大学教職員の参加があったこと（松本中２名六角橋中３名栗田谷中１名）。

・健康科学スポーツセンター課長の大学の地域貢献を意識した講演，カンファレンス担当教員の「語ろう会」運営協力，入江教授の全面支援など大学教職員の理解，協力が広がってきている。

４．課題

①　ボランティア先ごとの「カンファレンス」との有機的な結合の必要性

2016年度から始まったこのシステムに対応して，より効果を上げる方策を検討したい。

具体的には，私がカンファレンスを担当する学校（栗田谷中）の学生指導は，学校現場訪問時の指導とカンファレンスが結び付き効果の高まりを感じている。他の担当者の学校でも同じように効果を高めるための方策を考えてこのシステムの有効性を図りたい。他校の担当者との定期的な情報交換による双方の指導の充実，他校で開催する「語ろう会」の支援などができそうである。

②　学校管理職の学校経営ビジョンへの大学関与の促進

中間報告でも述べたことだが各学校の課題（教員教育，特色ある学校づくり，独自課題等）の取組に，地域の教育材である大学が関与していくことをもっと進められないかと考える。

栗田谷中や松本中での若手教員教育，六角橋中での部活動顧問教育，白幡小でのリーダー教員教育の実践は不十分ながら効果を上げたことを管理職と共有できた。ならば，学校側から大学へさらなる提案や相談を期待したい。大学としては日常的な呼びかけや，受け入れやすい環境づくりに努力していきたい。

③　大学教職員のさらなる意識改革

この取組を含め「学校ボランティア活動」の成功条件の一つに，大学教職員自身が地域の学校と学生をつなぎ協働することで多くの学びを得ることを実感できるかがある。この４年間で大学教職員の理解や協力は進んでいるが，私の力不足もあり，その広がりや深化にまだまだ余地を残している。今後ともこの課題を乗り越える知恵を絞っていく必要がある。

おわりに

「学生と教員が共に成長する場」を求める取組は福井大学の展開を待つまでもなく全国的に教師教育の視点から求められている。

横浜市内には教職課程のある大学も多い。それぞれの大学が，神奈川大学のこの実践の様に，地域にある学校と「学校ボランティア」を

通した「学生と教員が共に成長する場」を設けられないかと考える。既に実践している大学があるかもしれないが，この様な動きが，横浜の教育の底上げに少しでもつながればこんな嬉しいことはないと思っている。

［注］

(1) 入江直子・大場裕二・齋藤元「『学校ボランティア』13年の歩み」『神奈川大学　心理・教育研究論集』第41号（2017年3月）に詳しい。

(2) 活動する時の筆者の身分は給与の関係もあり福井大学教職大学院の非常勤講師でもある。年１～２回，大学院開催のラウンドテーブルに参加している。

(3) 筆者は松本中学校長時代（2004～2006年度）神大との中・大連携事業を推進した。学校ボランティア，部活指導，大学非常勤講師として中学教員派遣，中学講演会への大学教員講師依頼，大学祭への参加・協力，水泳部の神大プール借用，研究大会への学生参加と運営協力等さまざまな取組が展開できた。

　その一つである「総合的な学習の時間」におけるキャンパスツアー等の取組については，河上婦志子・鈴木浩「『生徒の学び・学生の学び』－中大連携の試み－」『神奈川大学心理・教育研究論集』第26号（2007年3月）に詳しい。

　中・大連携事業の取組は2005年から「パイオニアスクールよこはま」（提案公募型改革モデル校）に採用された。